

「潜在空間」について

「Self 心理学」へ向けての一試論

山 本 昌 輝

‘Potential space’

An essay on object-relating——toward a theory of ‘Self-psychology’——

YAMAMOTO Masateru

I. はじめに

精神分析理論の発展の歴史を後追って行くならば、その中心点に捉えられるものの移動から、イド心理学→自我心理学→self 心理学の流れをみることができよう。Freud, S. による精神分析の創始期は、Darwin の進化論を背景に、人格におけるその生物学的本能に支配されるイドの存在が強調され、副次的に自我が出来上がり、自我はイドからの本能欲動と現実からの要請、さらには超自我からの命令等に苦しめられながらも何とか妥協させる役割を担うものとされた。ところが Freud は、晩年に近づく著作ほど自我に主導的な性質を付与し、その後 Freud, A. によって受けつがれる精神分析的自我心理学の礎石を築いた。その自我心理学においては、理論の中心には自我が捉えられ、自我はみずからの生成の基盤を生得的な一次的自律装置（知覚、運動能、その他）として有し、イドの欲動を内容的、エネルギー的に手なづけ、とり入れることによって、いわばイドを支配しながらみずからの組織を増大させ自律機能を強化していくという点で、自我の主体性、独立性、自律的適応性が強調されるようになった。しかし、特に Hartmann, H. に代表されるような自我心理学は、ともすれば機械的で systemic な見方が主流を占め、むしろ「人間臭さ」のようなものの感じ難い心理学となっていると言えよう。一方、自我心理学とは別に、特に英国では対象関係論が展開した。それは Fairbairn, W. R. D. (1963) の「自我は根本的に対象希求的である」という主張にその独自性の極みを見ることが出来る。最近、境界例患者の精神病理やその治療技法をめぐって対象関係論が注目されるようになり、米国における自我心理学的な対象関係論が発展する契機を提供したように思える。自我心理学的対象関係論は、自我機能の側面、精神内界でのリビドー備給等の systemic な側面から接近するという、自我心理学の伝統を受け継いで、対象関係の在り方、発達を論じている。これに対して英国対象関係論は、より一義的に対象関係を把える傾向があり、それにおいては自我は主体的機能を担ってはいるが、力点は専ら対象関係の只中に在って、パーソナルな価値をもみずから包含する self におかれる¹⁾。この self が臨床的に意味を持っている概念である事は Khan, M. M. R. (1972) も述べている。筆者はこの Khan や、彼の師である Winnicott, D. W. の理論こそ self 心理学と呼んでもいいのではないかと考える。彼らは対象関係の中にある self の在り方を特に研究し、自我と self の対象関係の在り方を重視しているからである。少くとも現代社会では、個人はいかに自分自身

(my-self) と付き合いっていくかという問題が最も重要であり、そこでいう自分自身とは常に他者存在を前提にして存在している。そうした個人の在り方を説明し得る心理学こそ、筆者の言う「self 心理学」である。本論文では、筆者の独自の見解も含め、「self 心理学へ向けて」の試みとして、self の発達、とりわけ他者との「関係性」の出来上がってくる側面を明らかにする目的で「潜在空間」の意味について論じたい。

II. 「self 心理学」

まず、self という概念を明らかにしておく必要がある。Cooley, C. H. のいわゆる反映的自己もしくは鏡映自己 (looking glass self) という考え方がある²⁾。この鏡映自己とは人間が他人の自分に対する態度言動を自分の鏡映像のようにみて、それに基づいて自分の心につくった自己の姿である。様々な対人関係体験によってこの鏡映自己の素材が得られ、それによって、主体としての自我が自己なるものとして容体化した自分自身の像 (image) ないし心的表象 (psychic representation) を形成するが、この形成されたものを self と呼ぶ。そして、self には、例えば Winnicott, D. W. (1960) が「主体的意識」と生命感に根付いている「本当の自己」、および外界の要請に対して服従的、皮相的でいわば仮面の如き「偽りの自己」の二つを考えたように、幾つかの層があると考えられる。さらに時間性に沿って、例えば主体的自我が過去において自己として認めたものから、現在の時点において自己自身の姿として認めるもの、そして将来における自己と認めようとするもの、というような幾つかの局面が考えられるが、この考え方は、Rogerian の主張した現象的自己 (phenomenological self) 論と呼ばれるものに近い。筆者は、Winnicott の理解に従って、「本当の自己」と「偽りの自己」の二層を考えたい。すなわち「本当の自己」とは self の中核に存するもので、赤ん坊が自分の自発的な身振り、独自の気持ちを母親に照らし返してもらう所に体験する。一方の「偽りの自己」は、そのような自発的なものに対する母親側の照らし返しの失敗があって、その結果赤ん坊が適応するため、外界の必要に対して服従してしまうことによって出来上がる。従って、「偽りの自己」は自我にとってまさに客体でしかなく、自我が自分と認め、主体的意識として体験される「本当の自己」とは対照的に、ある意味では、他人事の如く体験される性質を持っている。以上が、筆者の考える「self 心理学」における self の意味であるが、以下、特にことわらない限り、「本当の自己」と「偽りの自己」の両者を含めた意味で self と使用する。

ここで、I でも述べたように、「self 心理学」は、英国対象関係論、特に Winnicott の業績を背景にして築かれている。それを特に「self 心理学」と呼ぶ理由は、対象関係(現実的対人関係と心的内界における対人関係、及びその相互作用)の脈絡で個人の心理を把握しようと試みる際、心理学的に最も意味を持つてくるのが self だからである。筆者は対象関係論を背景に、「関係性 (relatedness)」と「self 体験」の心理学として、「self 心理学」を構想している。従って、Rogerian の「自己理論」や Jungian の「自己論」とは理論的枠組が異なっている。Rogerian の「自己理論」が対人関係体験の脈絡において「自己」を中心に理論化した面では筆者の「self 心理学」と同様であるが、他者との「関係性」及びその「関係性」のでき上がってくる側面についての理論化が為されていないことが大きな相違である。(現象論的に把握される自己理論と精神分析的心理学の相違であると言える。) 一方、Jungian の「自己論」とは、その

self の定義からして異なっており、Jungian のそれが、個人の心的内容の総てを包括するものであるのに対し、「self 心理学」では、対象関係体験に由来し形成される、一部の心的内容のことを言っている。概して、Jungian の自己論は、個人内界主義的色彩が濃く、他者との関係性や対人関係の側面から個人を論ずるというよりは、その逆の方法がとられている傾きがあり、その点で大きく異なっている。一方、Kohut, H. らの主張する「自己の心理学」とは多くの類似点を持つように思われる。精神分析理論を背景に出来上がっていることもあるが、self を心理的世界の中心に捉え、「self-object」という鍵概念による理論化の方法は、筆者の考える「self 心理学」に非常に似かよっている。ただ筆者は「self-object」という概念に対して、「潜在空間」(Potential space)という概念をあえて使いたい。この「self-object」と「潜在空間」の概念の異同については後章で述べることにするが、ただ Kohut の「self-object」の概念の使用の仕方は、健康な場合も含め、自己愛 (narcissism) に寄与するものとして扱われているのに対して、筆者は「潜在空間」が自己愛に寄与するものとは考えていない。筆者の考えでは、むしろ「関係性」に寄与するものである。従って、この点に Kohut との見解にも相違が存在する。この「潜在空間」が「関係性」に寄与するものであることは本論文の主題であり、以下において明らかにして行きたい。

以上、self の概念についての若干の説明と、筆者の構想する「self 心理学」とこれまでの「自己論」や「自己の心理学」との異同について述べてきた。

先にも述べたように、筆者が「関係性」の心理学である「self 心理学」を構想する際、まず、基本的関係性を成立させているものについて考えていたのだが、そこで「関係性」の発達の一過程として存在する「潜在空間」が、発達の一時期を単に説明するだけでなく、この概念こそが人間関係の根本において重要な意味をもった概念であることに気付いた。以下、そのような考えに至った経過に沿う意味で、「関係性」の成立について次章で述べ、そこで「潜在空間」の果たす役割について検討し、さらに、基本的人間関係の在り方について議論を進めてゆきたい。

III. 「関係性」の成立過程

「関係性」の成立過程は、対象関係の発達とはほぼ同義である。従って簡単に人生早期の対象関係の発達を概観してみる。

生後1ヶ月は「正常な自閉期」(Mahler, M. S. 1968) と呼ばれるように、外界に対しても特に関心は示さない。乳児は、Spitz, R. によれば生後8日目頃から外界の感覚刺激に反応しはじめ、哺乳者の乳房に頭を向けるようになり、生後2ヶ月になると、人間の近づくことを知覚し、3ヶ月になると、人間の「顔」が特殊な意味を持ちはじめ、乳児は他人の「顔」の運動を追うようになる。そして大人の「顔」をみると「微笑」をもって応えるようになる。しかしこの時期、その「微笑」は特定の人物像に対するものではなく、「顔」という部分対象に対してのものであり、それゆえ対象以前の段階と呼ばれる。すなわち乳児の対象認知は、その対象のもつ一部の属性についてのものである段階なのである。そしてこの段階では母親を非自己として認知せず、従って母親に依存していることも意識されない状態であり、絶対的依存 (Winnicott) の状態である。この絶対的依存の状態の体験のなかで、Erikson のいう基本的信頼感が生まれる。

この対象以前の段階から乳児は次第に母親との連続した情愛深い交流 (哺乳活動、皮膚接触、

言葉による働きかけ等)をとおして、母親を他として全体的に認知するようになってくる。すなわちそれまでの部分対象から全体対象の世界へと広がるわけであるが、しかしそれはまだ自分と母親が身体的にも精神的にも別個の存在であるとの認識にまでは到達していない。すなわち自己表象も他としての対象表象も混然一体となっており、母親と二者一体的な共生的な時期である。さらにこの母親との共生関係は両者にとって快いものであり、この漠然とした快い体験は後に述べる Capacity to be alone の母胎となるものであり、その後の人格発達に大いなる影響を与える。

8ヶ月頃になると、幼児の神経学的発達も進み、それまで混然一体としていた対象表象と自己表象の分化がおこってくる。その際、母親の安定した表象の成立が基礎となって、その安定性と連続性が取り入れられ、安定した自己像が出来あがる。そして対象表象と自己表象の分化がおこると、幼児は母親を依存対象として意識できるようになるので、相対的依存の状態 (Winnicott, 1965, Fairbairn, 1952, Guntrip, 1964) と呼ばれる。見知らぬ人の前で激しい無力感を味わい、母親へのまわりつきがみられたり等、Spitz の言う8ヶ月不安がおこってくる。そして、この時期になると次第に母親は子どもの欲求への適応に失敗し始める。すなわち、母親との関係において、激しい両価的感情を体験するようになる。従って、いかにしてこの危機を乗り切るかが大きな課題となる。そして、外的に security が危機にさらされている時にその危機を乗り越えられるかは、それまでの欲求充足体験を通して得られた良き対象イメージを自己の内に再構成できるか(できているか)にかかっている。そして、この自己の内に再構成された良き対象イメージこそ、Winnicott (1958) の言う Capacity to be alone, 「ひとりでもいられる能力」——起源的には、前段階での母親と一緒にいて、一人で遊んでいた体験が母胎となって、ego-supportive mother がとり入れられ、内的な自我の支えとなっている——である。これによって、外的な危機は乗り越えられるであろう。

この良き対象イメージを自己の内に再構成する過程は、対象(関係)の内在化と呼ばれるものであるが、もう少し詳しく述べることにしたい。そもそも自他の分化は徐々に、言わば行きつ戻りつ進行していくものである。自他が未分化な(融合している状態の)絶対的依存の段階では、現実の母親も乳児にとっては想像物のひとつにすぎない。その状態から、母親が想像されるというより知覚される対象として体験される状態へ移行してゆく。乳児は、母親と融合している状態から、母親を自己から分離する段階になる。そして母親は乳児の欲求に対する彼女の適応の程度を減少させていく。それは、母親が乳児への高度の同一化から回復するためと、母親が乳児の新たな欲求、つまり母親を分離独立した現象としようとする欲求を認識するためである。その時、その移行過程においては、一部では自他が融合していて、母親を想像し、また一部では自他が分化していて母親を外界の対象として認知するという複雑に絡まった体験の時期が想定される。さらに進行すると、母親は外界の「自分ではない(not-me)」対象として知覚されるが、それでも、母親を自分の想像物として錯覚(illusion)することが起こる。その過程に出現するのが「過渡対象(transitional object)」である。これは自他の分化がさらに進み、母親が全くの「自分でない対象」として理解されつつある時に、乳児が自発的に選んだ無生物対象(例えば毛布やぬいぐるみ等)の愛玩物である。この対象の果たす役割は非常に重要である。先に述べたように乳児に自発的な、母親を分離独立した現象としようとする欲求が芽生えるが、それは母親の側の信頼性、乳

児の欲求に適應すること、喜んで乳児に没頭することなどから、安心感をもって生きてゆけると感じた乳児は、自由に動き回りたい欲求や、自律性を達成したい欲求を感じ始めることによる。この場合、母親がすすんで乳児に働きかけなければ、乳児は自律的にはなれない。しかし、まだ乳児と融合している状態から離れようとする、母親側のどのような動きにも、分離の脅威が起こる。この分離の脅威にさらされることなく、円滑に分離を進めて行くものが「過渡対象」である。そして「過渡対象」は独自の心的位置づけを持っている。というのは、客観的对象としての「自分でない(not-me)」所有物でありながら、主観的には「自分(me)」の延長として、主観的想像物の性質、すなわち、自分の空想、願望、欲求が付託され、象徴的には母親の乳房をも意味するからである。しかし、「過渡対象」が単に外在する主観的想像物でないことは、毛布にしろ、ぬいぐるみにしろ、その持つ現実性(actuality)一形、色調、膚触りなどの現実的特性一も大変重要な意味を持っていて、それが客観的知覚をも含んでいることから理解されるのである。Winnicott は、まさにこの性質、すなわち内的生活(主観的世界)と現実生活(客観的世界)の双方に関与し貢献していること、及びその位置づけが、「自分」と「自分でないもの」(me/not-me)の間に位置することから、「体験の中間領域」(intermediate area of experience)——「潜在空間」——を想定するようになったのである。ところで、母親(の乳房)を象徴する「過渡対象」を持つことで、乳児は次第に現実の母親との分離が可能になる。乳児の「過渡対象」との関わりは、本質において「遊ぶこと(playing)」と重なっているが、この時期のそれは母親イメージの内在化の過程の過渡的段階を表わす。この内在化過程の過渡的段階は、Winnicott が「ひとりでいられる能力」の起源で言及したものにみることができる。「ひとりでいられる能力」の基盤は、「幼児または小さな子どものとき、母親と一緒にいて一人であったという体験である」と Winnicott (1958) は言っているが、つまり「一人でいる幼児または小さな子どもと実際いつも頼りに出来るように一緒にいる母親またはその代理者との間の特殊な関係」が、母親像の内在化過程の過渡的段階を表わしているのである。「ひとりでいられる能力」が持てるようになるのは、母親像の内在化によって、母親との良き対象関係も内在化され、母親との身体的・空間的分離が最早、母親との心理的分離を意味しなくなった時、すなわち、身体的・空間的分離を越えて内的な母親像が信頼性なり内的な支えを提供する様になった時——「関係性」が成立した時——である。その意味で先の、この能力の基盤となる体験を見直す時、そこに一緒にいる現実の母親は幼児にとっては、体験の中間領域に位置していることが理解される。「そこでは一方はともかく一人でいるが、おそらくは両者とも一人でいるのだらうけれども、各々がそこにいることがもう一方の者にとって重要なのである」と Winnicott が言うように、母親と一緒にいて一人でいる幼児にとって、現実には母親がそこにいること(客観的に知覚されること)——あるいは、二人でいること——と、母親が自分の延長(me-extensions)であること(主観的に想像されること)——あるいは、一人でいること——が重なり合い、相互作用が起こっている。従って、母親は幼児にとって、「自分」と「自分でないもの」の中間領域に位置づけられ、体験されていると言えるのである。ところで、これまでの Winnicott の記述の引用からは、体験の中間領域は、自他表象の分化が始まって、未だ完遂していない不完全な時の「自-他」の中間的性質(「自」でもなく「他」でもない)と、「他」としての知覚が徐々に働いて来るようになった時に、「他」のもの(外的現実)に在るものを内界に内在化する際の中間的段階の二つを意味している様に思われるかも知れない。しかし、

「内在化」は「取入れ」とは異なり、「自—他」の融合状態においては、客観的知覚も主観的想像ないし幻想と融合して、むしろ主観的に体験されていたものが、「自」と「他」の分化とともに、対象の客観的知覚物と主観的想像物との分化が起こり、現実の対象像と内的な主観的想像ないし幻想の対象像が識別され、外的現実の対象とは「独立に」内界の対象が存在することが確立すること——Winnicott (1969) は「対象の使用」という観点から、このことを論じている——を意味する概念である。従って、体験の中間領域について、先に挙げた二つは実は同一のことを言っているのである。以上のように「自」と「他」の分化が、体験の中間領域において、対象との分離(対象が「自」の外に在り、万能的統制外に在ることの認識)の脅威にそれほどさらされることなく、進行するのは、母親に対する信頼感や体験に基づいた確信によって、外的現実として知覚し認識しつつも、「錯覚」を通して、主観的事象(空想、願望、欲求等)を付託し、まさに「自分」と「自分でないもの」の中間領域のものとして「遊ぶこと」に由来するものであることを Winnicott は述べている。このように、信頼感や確信に基づいた「良き母親像」が内在化された時、個人は「ひとりでもいられる能力」を獲得し、対象との「関係性」を獲得するのである。その時、先に述べた「過渡対象」は意味を失い、リンボ界に追放される(Winnicott, 1953)。そしてそれに成功した個人は、徐々に確固とした「self 像」形成へと進んでいく。すなわち身体運動力の発達も伴い、母親からの独立欲求が出て来て、母親との個別化が押し進められ、より現実的な人間関係を営むようになる。そして、この母子の間で「関係性」を基盤に獲得した、安定した人間関係意識(inner ego-supportiveness)を母胎にして、それまでの二者関係の世界から、徐々に他の人達との対象関係が形成できるようになる。これからは、父親との関係が問題になって、父親との関係を通して父性性(力強さ、頼れる感じ)を取り入れ、社会化が進むことを促進するのであるが、「関係性」の成立という観点からはさほど重要ではないので、これ以後の発達についての論述は割愛することにして、「関係性」の成立において「潜在空間」の果たす役割をもう一度、確認しておきたい。

「関係性」の発達を展望する際に、「潜在空間」という語の多用を避けるために、「体験の中間領域」という語を使用したがる、そもそも「潜在空間」の定義について述べておく必要がある。Grolnick, S. A. et. al. (1978) の語り集によると、「潜在空間」とは「自己表象と対象表象の分化が不完全な時の幼児と母親の間の——あるいはもっと積極的に、幼児が二者一体(dual unity)もしくは共生膜から孵化する時の——隠喩的空間。過渡過程は潜在空間の中で起こり、しかもそこから過渡対象及び現象と錯覚、遊び及び創造的想像の能力が出現する」とある。この表現に、「潜在空間は簡潔に要約されてはいるが、その「関係性」の成立に果たす役割が含まれていない。

ところで、展望の中で述べたが、「関係性」の成立の本質は対象の内在化である。発達的には、内在化の成立過程で、客観的知覚と主観的想像が重なり合い、体験の中間領域——「潜在空間」——が現象するのであるが、それは、別の見方をすれば、「自」と「他」の間を橋渡しする、あるいは結びつける空間である。その空間によって、「自」と「他」が全く別個のものとして切り離されてしまうことが回避されるのである。また、Winnicott の言い方をすれば、「自」と「他」はこの「潜在空間」によって結びつけられ、しかも分離されているのである。別の言い方をすれば、現実の母親と内的対象である母親像とをつなぎつつも分離させている空間が、「潜在空間

間」である。従って、その役割は、幼児が対象の世界を自己から完全に分離してしまうことなく（関係を持たせつつ）、対象の内在化（「関係性」の成立）を推進してゆくことを可能にすることである。そして、対象の内在化が成立した時、幼児は内的対象を独自に使用することが可能になり、もはや「潜在空間」が「関係性」において果たす役割は消滅するのである。それ以外の分野での「潜在空間」の果たす役割について、Winnicott は「遊ぶこと」や「文化的体験の位置づけ」等で検討しているが、本論文では触れないでおく。ただ心理療法に代表される様な、新しく self を創造する体験において、「潜在空間」が現象することは指摘しておきたい。というのは、内在化された対象表象も self に属するのであるが、対象像も含め、self はその後の対象関係の体験によって、「新陳代謝 (metabolization)」してゆく。その場合、内在化されている対象（関係）と外的対象（関係）の間に、及び内的な self 像と外的対象によって照らし返されている「self」との間に、交互作用が生ずる。その交互作用とは、投影と取り入れ、及び同一視を意味し、内的なものと外的なものとの重なり合うことを意味する。その交互作用の起こる‘場’が「潜在空間」なのである。ところで、この内的なものと外的なものが交互作用を起こし、self に何らかの結果を残す体験を「self 体験」と呼ぶ (Khan, 1972) が、これは「生」を体験することと等しく（「潜在空間」で起こるものである (Winnicott)）。しかし、これについても、これ以上議論を進めることは別の機会にゆずるとして、本題に戻る。結局「関係性」の成立に関しての「潜在空間」の果たす役割は、対象の内在化過程の一時期において、対象世界との完全な分離を回避する「過渡的關係性」を保証するものである。従って、「関係性」が成立した時、「関係性」に対して果たす役割は消滅する、と考えるべきものである。もちろん、その後も「潜在空間」は様々に現象する余地を残しているのだけれども、それは「関係性」との関連で現象するものであり、言うならば、「関係性」の部分的退行によって生じるものと言うことが出来るものである。

個人は母親との「関係性」を母胎にして対象関係を拡大してゆくが、それと並行して、self の一部である内的対象関係の「新陳代謝」が起こる。対象と関わること (object-relating) は、常に「潜在空間」を含蓄している。「self 体験」で言及したように、内界と外界の交互作用が起こり、「関係性」を拡大してゆく営みがあると言える。しかし、この場合に現象する「潜在空間」は、発達の、乳児の「自一他」の分化が起きている時に現象したそれとは、本質においては同一であっても、かなり質的に変容していると考えべきであろう。何故ならば、その両者には、「自一他」の分化の進行中と達成後の違いがあるし、特に後者には分離の脅威など存在しないからである。そのように考えると、かなり様相は異なるにしても、「潜在空間」は最初の「関係性」の成立過程における発達の一時期を単に説明する概念ではなく、基本的な人間関係の‘場’において現象しているということから、この概念は人間関係の根本において重要な意味をもった概念であるという結論に達するのである。

ここで、陰画的に考えてみることは有意義なことであろう。「潜在空間」が欠落した場合を考えてみたい。最初の「関係性」が成立する時にそれが欠落した場合、展望の所で論じたように、完全に対象世界と分離してしまうために激しい分離の恐怖が起こり、心的外傷となってそれ以上の情緒的成熟は歪曲される。まさに self の「破滅 (annihilation)」を意味し、孤独にしか生きてゆけなくなってしまうと考えられる。また、最初の「関係性」の成立とは関係なく、一般の人間関係において「潜在空間」が欠落した場合、「self 体験」で述べた、内界と外界の交互作用が起

こらないため、対象関係の体験が個人に根付きにくい(内的な変容が起こりにくい)状態になってしまう。これは Kernberg, O.F. (1963) が境界例患者の病理の一つとして挙げた「新陳代謝されない内的対象関係 (nonmetabolized inner object relationship)」と関係があるように思える。しかし、この検討は本論文の目的ではないので、また別の機会に述べることにしたい。さて、以上のべてきたことから、先の結論の妥当性が例証されたと考える。

IV. 「潜在空間」と「self-object」

ここで、Ⅱの所で問題となった「潜在空間」の概念と Kohut の「self-object」の概念の異同について論じたい。

「潜在空間」については何度も述べたように、主観的对象と客観的に知覚された対象とが重なり合った、「自分」と「自分でないもの」の中間領域に位置づけられる空間のことであるが、Kohut の「self-object」は自己の一部として体験される(外界)対象のことを言っている。「人は生まれながらにして力強いものである。何故ならば、共感的「self-object」という人的環境が自己そのものとしてあるからである」という Kohut (1977) の言葉から理解できるように、それは「自-他」の融合した状態で体験される、客観的には「他」の、対象のことを意味する概念である。その点では Winnicott の「潜在空間」の性質と類似している。しかし、Winnicott の分離の主題は Kohut では考えられていないので、当然、内と外を橋渡しするもの、もしくは自己と対象の間を満たすものとしての「self-object」は考えられていない。従って、「潜在空間」のように個人の内にも外にも位置づけられない性質を帯びたものとしてではなく、やはり一つの外界に在る対象としてむしろ考えられていると言ってよい。だからそれは内在化されることもある。これは中間領域である「潜在空間」の事象、例えば「過渡対象」には在り得ないことである。従って、自己の欲求を投影し、自己の万能感に関して体験される性質のものであると言うべきであろう。これは大きな概念的相違である。Kohut の場合、外界に在る「self-object」に対して(自己愛的に)理想化が起こり、その理想化された対象が self に内在化されて精神内界構造となる過程を「変容性内在化 (transmuting internalization)」という概念によって説明する。これは、Kohut の見解にはいわゆる対象(関係)の内在化という現象は含まれておらず、彼が対象関係という場合、「心的世界の中心」である self と外界対象の関係を指すに過ぎない。従って「内在化」が考えられるのは唯一、「self-object」体験で、それと対極的な「真の対象」との交互作用はむしろ考えられていないし、その「真の対象」は単純に「分離・独立した」現象として見られているようである。ところで「変容性内在化」とは「self-object」が体験され内在化される過程において変容をとげるところからそう呼ばれるのであるが、それを簡単に言うと、理想化された対象に対する幻滅(それはたいてい、対象に対する正しい現実認識でもある)が適度に起こった場合、理想化された「self-object」へのリビドー投資が撤回され、非人格化された特定の機能が内在化されることである。この「変容性内在化」が正常発達過程として起こるばかりでなく、精神分析の治療過程としても見られると Kohut は主張する。内在化過程を主観的对象 (self) と客観的に知覚された対象との交互作用を経由して起こるものと見る見方においては「self-object」と重なってくる部分もあるのだが、それが過渡的なものとしても、「関係性」を保証するものであるという視点は Kohut の考えからは生まれてこない。ここに根本的視点の違いを見る

のであるが、Kohut は自己愛的側面の起源を人格に探した結果それがこの self と「self-object」の関係にあることを見出したのであり、対照的に Winnicott は健康な人格の情緒的成熟の面から、他者との「関係性」を探る際に見出したものが「潜在空間」なのである。その点で「潜在空間」は様々に応用の効く概念であるが、一方の「self-object」はかなり普遍化の困難な概念であるように思える。しかし、「self-object」も、自己愛的側面の事象、例えば自尊心、等の発達についての説明に使用しやすい概念ではある。しかし、それでは「生」を体験することや、より人間の本質的価値に近いもの、例えば先の自尊心に対して自分自身への信頼が出来る側面、等については断然、「潜在空間」の方が有用な概念なのである。

以上で、「潜在空間」と「self-object」の異同についての議論は終わるとして、筆者が「潜在空間」という語を使用した理由も理解されたと思うので、最後に、基本的人間関係の在り方について考察したい。

V. 基本的人間関係について

ここでは、Ⅲで展望した対象関係の発達を繰返すつもりはない。従って、ここで述べることは、Ⅲの展望で触れた「関係性」の成立した個人の人間関係の在り方である。

Ⅱでも述べたように、「関係性」の成立した個人は、内的対象関係を母胎に、外的対象との間を「潜在空間」で満たすことによって交流するようになる。内的主観的事象と外的客観的事象とが重なり合う‘場’において交流するのである。もし、そのような‘場’を共有することが無いとしたら、まさに「自-他」の分化が起こる時のように、完全に分離してしまい、つながるところ (relatedness) が無くなってしまふのである。その場合、内と外の交互作用が起こらないために、「self 体験」は成立しなくなるのである。「新陳代謝」ということに言及したように、様々な対象関係の体験によって個人の self は普通、より豊かになっていく。それは「生きている場」において「self」を体験することによる。self は対象の反応のうちに照らし出されるもの(「鏡像」)を素材にして形成される。それを形成するのは自我機能の一つである。self 自体も、自我にとっては対象のひとつなのである。様々な対象関係の体験は「self」を体験することでもある。と言うのは、対象に映る「self」を見出し、体験することになるからである。そのように、「self」はまず外に見い出され、内に内在化され、self に統合されるわけで、その間に「self」の過渡的段階を想定することが可能であろう。おそらく、外にでもなく内にでもない「self」(の材料)を考えることが可能なのである。何よりも内的な self に変化が起こるためには、外的なものとの「関係性」が保証されねばならない。言わば、内的な self と外に見い出された「self」とが重なり、ずれる部分が、それによって内と外とが分離してしまうことなく、内的な self に同化されたり、異化されたりすることが起こらなければならないのである。self は、様々な対象関係での体験を通して発展してゆくが故に、外界に「self」を見出し、それを外界(対象)から分化し、self として自我領域に内在化し、統合する営みは一生継続く。この営みが先に述べた「新陳代謝」である。そして、その間の「過渡的關係性」を保証するものが「潜在空間」である。この面の主張は、Winnicott の心理療法に対する考え方にも共通しており、彼は心理療法を治療者と患者の「遊ぶこと」が重なり合う領域で成立していると考えている。それは共有現実を意味し、治療者と患者の「自」と「他」の境界が不鮮明になる領域である。治療体験の本質は、self の「新陳代

謝」であり、「過渡的關係性」を基盤に「遊ぶこと」(内と外の交互作用)なのであり、言い換えると「self 体験」をすることなのである。最終的に内在化され、self として統合される(対象も内在化されると self の一部となる)と、自我の内的対象となって、自我が独自に使用することが可能になる。そして、その時、「過渡対象」同様、「潜在空間」は意味を失ってしまう。従って、「潜在空間」は内在化過程の一時期に現象し、内在化を完遂した時に意味を失なうのである。しかし、self の「新陳代謝」は生涯続くものであり、その意味では、「潜在空間」は対象関係の在る所に現象しつづけるものであるとも言える。

結局、個人の基本的人間関係を考えると、その関係する所に「潜在空間」が成立することによって、交流が生じ、相互に根付いていく体験(「self 体験」)が可能になると言える。その意味で、「潜在空間」は、人間関係の体験の根本において現象する重要な概念であることが理解されるのである。

VI. おわりに

以上、「self 心理学」へ向けての一試論として、「関係性」の成立、及びその際に果たす「潜在空間」の役割について述べ、それが発達の一時期だけを説明するものではなく、人間関係体験の根本に在るものとして扱えられるべき概念であることを述べてきた。途中には、Kohut の「自己の心理学」との異同を示す意味で、「潜在空間」と「self-object」の異同についても論じた。

さらに今後に残された課題としては、この「self 心理学」の全体像をより明確に構成することも必要なのであるが、とりわけ臨床場面における「潜在空間」の役割、「self」の臨床的意義、及び臨床場面の「self 心理学」による分析(転移、逆転移、等々)が考えられる。全体として不十分な議論になっている印象は、本論文を通して否めないが、今後、別の機会に補ってゆきたいと考えている。

注

- 1) Guntrip, H. S. (1971) は米国の自我心理学と英国対象関係の人格(機能的主体)についての見方から、前者を「体系自我 (system-ego)」, 後者を「人格自我 (person-ego)」と呼んでいる。
- 2) 北村晴朗 (1977) による (143頁)。

文 献

- Khan, M. M. R. (1974) *The privacy of the self*. Int. Univ. Press, New York.
 ——— (1978) *Secret as potential space*. in Grolnick, S. A., et al. (ed.) *Between reality and fantasy*. Jason Aronson, New York.
- Kernberg, O. F. (1976) *Object relations theory and clinical psychoanalysis*. Jason Aronson, New York.
- 北村晴朗 (1977) 新版・自我の心理 誠信書房。
- Kohut, H. (1971) *The analysis of the self*. Int. Univ. Press, New York.
 ——— (1977) *The restoration of the self*. Int. Univ. Press, New York.
 ——— (1978) *The search for the self*. 2 Vols. Int. Univ. Press, New York.
- Guntrip, H. S. (1971) *Psychoanalytic theory, therapy, and the self*. Basic Books, New York.
- 丸田俊彦 (1982) Kohut の自己 (self) 心理学 精神分析研究, 26 : 21-29.
- 牛島定信 (1982) 過渡対象をめぐる 精神分析研究 26 : 1-19.

山本：「潜在空間」について

Winnicott, D. W. (1965) The maturational processes and the facilitating environment. Hogarth Press, London.

—— (1971) Playing and reality. Hogarth Press, London.

以上
(本研究科博士後期課程)